

鏡の傳生を考へ、その見解を更新した處の終末の「上代古墳出土の古鏡に就いて」なる一編が先づ擧げらる可きである。同様古墳墓研究中注意すべきは外形の研究にとゞまらず、内部構造に注意が向けられた事であつて、之亦著者の實物に即した考古學的態度の結果のあらはれに他ならない。而もこれに就いても大正十四年發表の「上代墳墓の營造に關する一考察」と終末に載せた「本邦上代高塚の内部構造に就いて」とを比較するならば、たえず注意を實物の示す所に向け、自家の前言にこだはる事なく歩一歩新しい見解を加へられる態度が、あざやかに浮び出てゐる。古墳に關する自餘の諸編は著者自ら云ふ如く、かゝるより進んだ見解への階梯を示すものとして讀者の關心を唆るであらう。なほ如上の諸見解は云はゞ綜括とも見る可きものとして、「上代の遺物遺跡と其の文化」があつて便利である。

右の弊見で知らるゝ如く本書は著者が先人の學を受けて自ら修築しつゝある日本原史時代の考古學書であり、而もそれは發展形に於いて示されてゐる。先きに出た『支那考古學論攷』を知る吾人は今本書を手にして、過去の著者が歩まれた考古學の道を窺ひ得ると共に、その補記を通じて將來をも推知し得る感がせられる。本書の例言に「此の書を編して、自らの十數年其の歩みの遅々たる事を省み、またそれが一つの型をとつてゐると云ふ右の現實に對して、故(濱田)先生が晩年筆者に望まれた新たな分野の開拓に就いて思ひを深くせざるを得ないのである」と謙虚にも述べて居られるが、しかし右の著者の學問の行き方、たゆまざる努力か

らすれば、永遠にその分野に行き詰りはないであらう。

(本文七六四頁、圖版八八葉、弘文堂發行、定價十四圓)(藤岡謙二郎)

諸葛孔明

宮川尚志著

諸葛孔明といへば、東洋史を習つたけれども忘れてしまつたと稱する人でもその名を憶えてゐるほど有名であるが、しかしいつたい何をした人か、どういふ人か、となると、精確なことはこの時代の歴史を專攻してゐる人でなければ、もうあやしいのである。著者宮川氏はこの時代の研究に眞摯な努力を續けてをられる學徒である。私達はその諸葛孔明傳を安心して聽けるだけでなく、大きな收穫を期待し得る筈である。少くとも私は本書から養分を吸収しようとして讀み、決して裏切られることはなかつたのである。

本書はどういふ態度で書かれてゐるか。序によると、「あくまで孔明の傳記を書くことに終始し、彼の生涯の各時期と彼の環境である當時の社會との關聯において生起してきたる事件を説明しながら彼の内的生活の動きをも窺ひ知らうと庶幾」されたのであり、簡潔に言へば、「孔明の人となりを再現」することが目的である。

これは勿論歴史的人物の傳記を書く正しい態度であらう。かゝる意圖から、孔明の生涯を彼の環境、時代との關聯に於て、

第一期 前半生 二十七歳の時まで

第二期 壯年時代 それ以後四十二歳まで

第三期 晩年 四十三歳から五十四歳まで

といふ風に、即ち時代が英雄を作つた第一期、英雄が時代を作つた第三期、その過渡時代の第二期と三時期に分け、それらを本文では前編、中編、後編に配して記述されたのである。(もつとも「はしがき」には第一、二、三編と記され用語の不統一がある)そして孔明以前の時代の情勢は前編の中で説かれ、歿後の情勢や後世の評論も後篇の中に含まれてゐる。あくまで孔明の傳記に終始する意圖から、このやうなはつきりした構成をとられたのであらう。

本書の内容をなす多くの事件はあまりにも目まぐるしいのであるが、ごくあらましを紹介すると、

前編 前半生 先づ孔明が生を享けるずつと以前から二十七歳頃迄の時代を概述して讀者にとつての豫備知識を興へ、その時代に育つた彼の生立をその家系から説き、劉表の鎮する襄陽附近に寓居した孔明その他の名族の社交界を述べ、次に群雄間を游泳して劉表に投じた劉備の人望と責任、その漢室匡救主義の説明から、受けた孔明態勢、劉備と襄陽名士との交渉、そして三顧の知遇を曹操南下のが天下三分策を謀いて劉備に仕へたが、曹操のために荊州潰え、劉備と呉の孫權との提携が始まらうとする孔明二十八歳迄の叙述である。

中編 壯年時代 孫權、劉備の連合により曹操の天下統一の野心が赤壁の一戦に粉碎されたことから、孫劉の對立、その解消に次いで、劉備の益州進出の經過、孔明の蜀中の豪族統御、内政刷新を述べ、孫權、劉備の荊州分割、曹操、劉備の漢中爭奪の經過、

更に關羽の中原進出とその失敗による荊州の喪失に至るまでの目まぐるしく移り變る經過の叙述である。

後篇 晩年 劉備崩じ、遺詔をうけた武郷侯孔明は内治に努め、戰時體制を整へるとともに、蜀吳の同盟、益州四郡の平定により北伐遂行の前提條件を完成し、いよいよ出師の表を上つて北伐を敢行したが、街亭にまた陳倉にといづれも成功せず、持久策をとり、遂に五丈原の陣中に歿するまでの涙ぐましい經過を詳細に述べ、歿後の蜀漢の有様、その遺文を通じて孔明の人となりを描き、後世の評論をこれに加へてある。

この様な簡単な紹介で本書の内容を傳へることはできないが、數多くもない史料を綜合解釋して孔明の生涯をその時代の動向とともに明かにされた本書によつて、その清廉潔白、篤實な人格、内政外交上の卓越せる政治的手腕、そして終始蜀漢のためにつくした烈々たる漢室復興精神、それらをはつきりと知ることができるのである。しかも變轉きはまらないこの時代の複雑な動きを、少しの混亂もなく鮮やかに描かれた著者の努力と理解とに對しては深い敬意を払はねばならない。

しかし、とこれから缺點を擧げることになるのであるが、以上紹介したところからも氣付かれるやうに、一つの喰違ひを指摘することが出来る。即ち「はしがき」では孔明の出盧前を第一期としながら、本文では出盧後、劉備の下にあり荊州を逃れて孫權との交渉を生ずるところ迄が前編に含まれてゐる。この僅か一年の喰違ひは、單に形式的不備といふだけではなく、もう少し重大であ

ると思ふ。「はしがき」の区分法は、孔明が私的生活から公的生活へ入つたところに意義を認めるもの、本文の区分法は、孫權、劉備の連合により曹操の天下統一の希望が赤壁の戦に於て坐折し、こゝに天下三分の形勢が始まらうとするといふ點に時代の轉期を認めるもの、前者は孔明の傳記を書く立場、後者はこの時代の歴史全體に就いての觀方、と言ひ得るであらう。さう考へ得るならば、著者はこゝで歴史家としての姿をうつつかり出すことによつて、かへつて孔明の傳記に徹するといふ意圖が幾分か稀薄になつてゐるやうに思はれるのである。

本書を東洋史を専攻してゐない人に讀ませたところ、言葉が少し難しすぎるといふ返事であつたが、それも注意して讀めばそれほど困難でもないであらう。この程度の難しさは、文章を下手に讀みやすくしようとして内容までも通俗に墮してしまふよりはるかにまさるものである。一般的讀物でありながら、階處に假借するところなき態度で鋭い歴史理解がきらめいてゐる本書は敬服に値すると思ふのである。(支那歴史地理叢書第八、四六判一八八頁、圖版四、地圖一、昭和十五年十月、富山房發行、定價壹圓貳拾錢)(小畑龍雄)

東亞論叢 第三輯

昨年七月にこの論叢の第一輯がはじめて刊行せられ、第二輯が今年二月に出たのであつて、収録する所の論文には雄辯力作が多く、大に斯界の注意を惹いてゐたのであるが、最近にまた第三輯

が公けにせられた。所載の論文は次の十篇で、今度は殆んどすべてが滿洲蒙古關係である。

「滿洲の地域性」——その學的方法に就いて——(小田内通敏)

史學と地理學とを一元化した研究による、滿洲の地域性の科學的研究方法を説かれたものである。その例として龍江省甘南縣の地域性が論じられ、また地域性の研究の上に於ける航空寫眞の效用、北米大陸と滿洲との相似關係などが説かれてゐるのも興味深く、われわれ史學關係のものにとつても頗る示唆深い論文である。

「遼西の交通路に就いて」(岡田一徳)

滿洲の古地理については「滿洲歴史地理」「滿鮮地理歴史研究報告」に收められた諸研究をはじめとして今まで非常に多くの研究が發表せられて居り、ことに近年は各地に實地踏査が行はれ、且つ正確な地圖も作られてこの方面の研究はめざましい進歩を遂げた。この論文はこれら研究の結果と著者多年の勞作の結果とを綜合して唐代より清代に亙る遼西の交通路の變遷を説いた勞作であつて、數年前に一度收書月報二十六號に掲げられた所のものである。この街道は歴代政府の遼東に於ける根據地と、遼河の渡河點によつて規定づけられるものであつて、著者の説く所に從へば、唐・遼・元・明代には遼陽より遼河下流の三岔河を渡り北鎮に達する路をとり、金代には阿城——奉天より遼河の中流を渡つて北鎮に至る路がとられ、この渡河點はまた上都に至る街道として元代にも用ゐられ、最後に清代には奉天より巨流河遼河を渡り北鎮または義縣に至る上流遼河の路が用ゐられたといふ。地名